

# サンディエゴ

—中嶋 尚雄—

こちらの春学期は先月上旬まで。卒業式も終って、もう長い夏休みに入った。授業の期間中は学生(大学院生)も教師も真剣勝負で、日本の大学に較べると、ずっと厳しい。しかし、日本の大学のよ

うに、教育や研究以外の雑事、とくに時間ばかりをとられる不毛な会議に煩わされることがないので、精神衛生上は大変さわやかである。

## 世界に認知される スズキ・メソッド

カリフォルニア大学サンディエゴ校は、ノーベル賞受賞者を八名も出している総合大学だが、音楽の講座も充実していて、コンピュータ・ミュージック

などでは世界の最先端を走っている。立派なシンフォニー・ホールをもつサンディエゴ交響楽団や地元のラ・ホーヤ室内楽協会の演奏会活動も盛んで、私もこの期間、よくコンサートに通った。このよ



一昨日は私の東京で

の合奏仲間、この春学期からこちらで日本の教育制度を講じている文部省出身の光田明正・前国際交流基金常務理事夫妻(夫人は芸大チェロ科卒)と一緒に学長のディナーに招かれた。認知心理学の世界的権威でもあるリチャード・アトキンソン学長ご夫妻とのお話は、最近の日本の政局のことなど多岐にわたったが、たまたま話題

が音楽のことに及び、私が終戦直後に故郷にできた松本音楽院(才能教育研究会の前身)で鈴木鎮一先生からヴァイオリンを習ったこと、鈴木先生は九十四歳の現在も大変にお元気で松本に住んでおられ、第一線で指導されていることなどをお話すると、学長ご夫妻もスズキ・メソッドの子供達の演奏を聴いて感激したとのこと、私

## 新しい世紀への構想を

### 国際音楽短大計画の挫折に思う

(上)

とになったという。この件では鈴木先生から直接お電話をいただき、設立発起人の末席に列していた私としても甚だ遺憾であり、また同時に、設立に奔走された方々の労を多としなければならぬ。

### 国際的な要請に 小規模構想の矛盾

るで、大局的に事態を再考してみたい。まず根本的な問題として、国際音楽短大構想には大きな矛盾があった。世界に冠たるスズキ・メソッドなのに、才能教育研究会が目指したのが、たえばジュリアード音楽院のような国際的レベルの教育研究機関ではなく、また四年制の専門大学でもなく、小規模の音楽短大だったと

はスズキ・メソッドの特質などについての質問攻めにあつた。このように今や日本を代表する国際的な文化活動として世界に認知されているスズキ・メソッドであるが、その母体の才能教育研究会がここ数年にわたって推進してきた国際音楽短期大学設立構想が資金不足で挫折し、同会は精算委員会を設けて残務整理に当たること

気持としては、このような結果は必然のことと思われ、またそれでよかったのではないかと考えている。その理由の一端はすでに本紙のこのコラムに書いたことがあるけれども(一九九一年三月五日付「国際音大構想への私見」、事柄としては個人の感慨にとどまることではないので、読者の皆さんとともに、少し距離を置いたこと

いう、自己認識と目標設定に関わる根本矛盾である。関係者は短大なら設立が容易だと考えたのであろうが、今日の時代において、それでは才能教育研究会自身の当面のニーズには応ずるものだとすると、広く社会的、国民的ひいては国際的な要請に合致したものだとはいえなかった。したがって当事者の熱意に

起することができなかったであり、その第一歩の地点にそもそもの踏きの石があったといえよう。しかも、小規模とはいえ、短大である限り、大学設置基準によって音楽以外の語学や一般教育科目の教員を雇い入れたら、敷地や建物を用意したりしなければならず、一学年せいぜい百二十名前後の学生定員では、いくら高い授業料を取ってもまず経営が成り立たない。しかも全国的に見て、音楽短大はすでに過剰であるばかりか、どこも行き詰まっていて、国際情報学科や国際文化学科へ改組して生き残ろうとしているのが現状である。東京の尚美音楽短大などがその例であらう。

### 設置姿勢に 厳しい文部省

私は昨年四月に学際的・広領域的な新しい学問分野として東京外大に新設された地域文化研究科博士課程の設立準備委員長として過去六年間文部省に足しげく通わざるを得ず、大学や大学院の新設に関する文部省の意思決定過程にもかなり馴染んだつもりであるが、たとえ私学といえども、音楽短大の新設に関する文部省の姿勢には、きわめて厳しいものがあるように見受けられた。今回の構想は結局、文部省に設置申請をするまでもないとならなかったのであるが、たとえ才能教育研究会が順調に資金を調達でき、市と県の協賛を得て当初の計画どおり約二十億円を用意して設置を申請したとしても、その認可に到るのは容易ではないように私には思われた。(カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授 松本市出身)